

2030 年までの救急需要予測について

年々増え続ける救急需要に対応するため、将来の救急需要予測（救急出場件数）について、今年 7 月から消防局と横浜市立大学による共同研究を進めてきましたが、このたび研究結果がまとまりました。

1 共同研究の概要

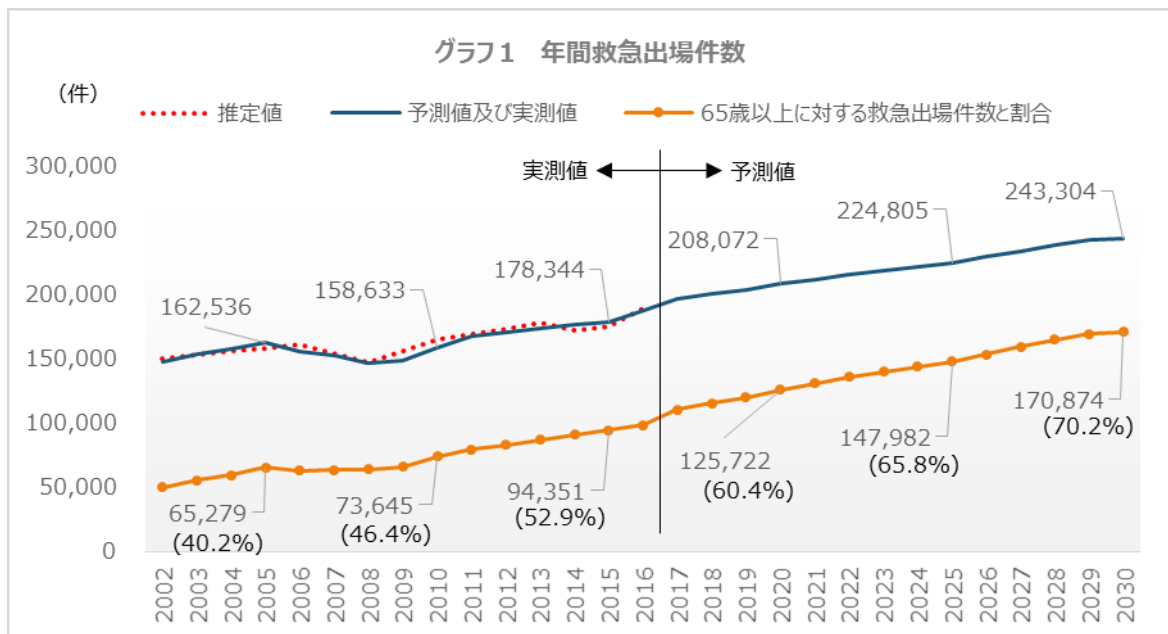
横浜市立大学医学部臨床統計学教室の協力をいただき、データサイエンス※の手法を用いて 2030 年までの救急出場件数を予測しました。

研究にあたっては、消防局の保有する 15 年間分、約 250 万人の救急搬送記録に加え、市内の将来人口推計や流入人口、インバウンド、気象の影響等を加味しました。

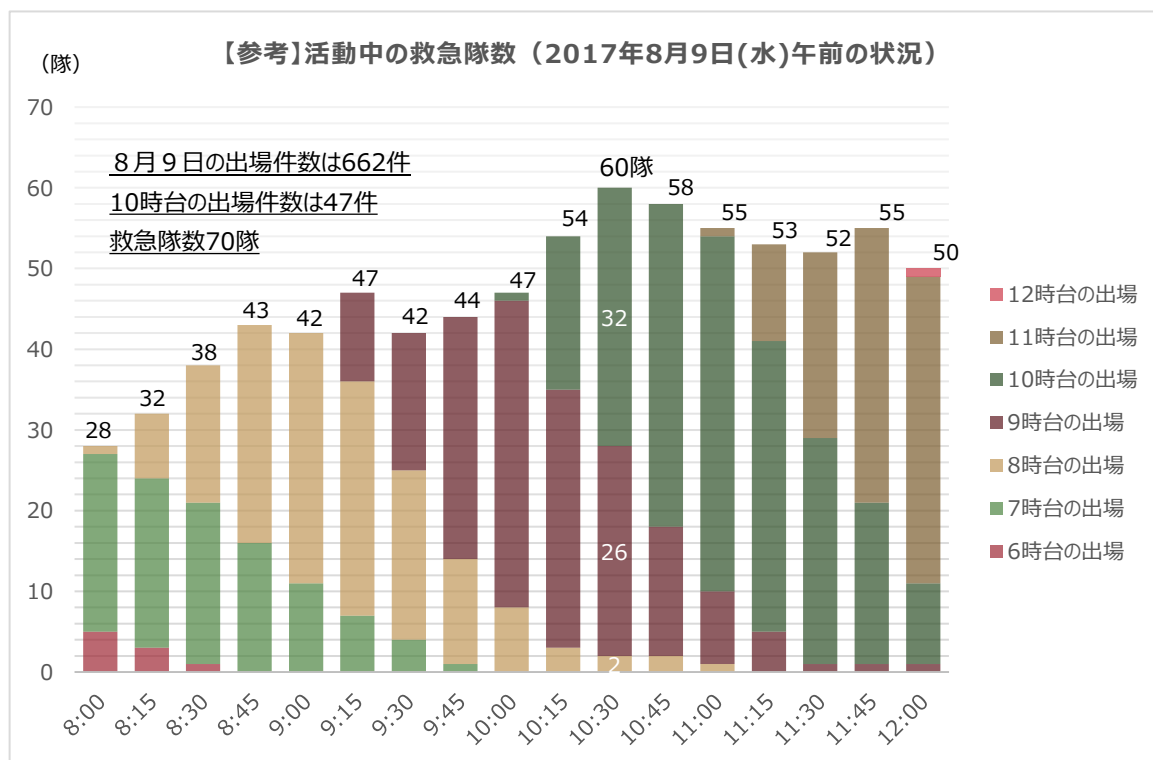
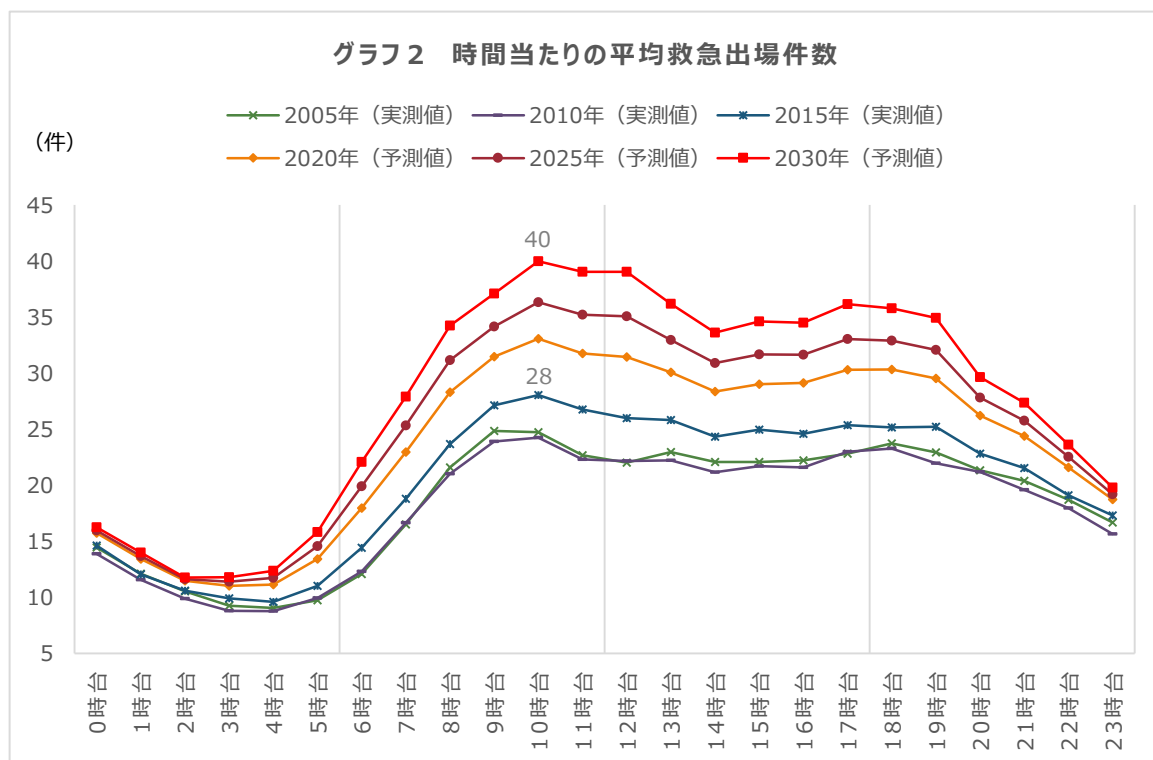
※データサイエンス…社会の様々な分野で生まれる膨大なデータから、統計学や計算機科学等をベースに意味のある情報、関連性を導き出す学問領域。

2 研究結果のポイント

- (1) 高齢者の救急搬送は増加傾向で、2030 年の救急出場件数は 24 万件超（2015 年の 1.36 倍）に達し、65 歳以上に対する救急出場が全体の約 70%を占める見込みです。

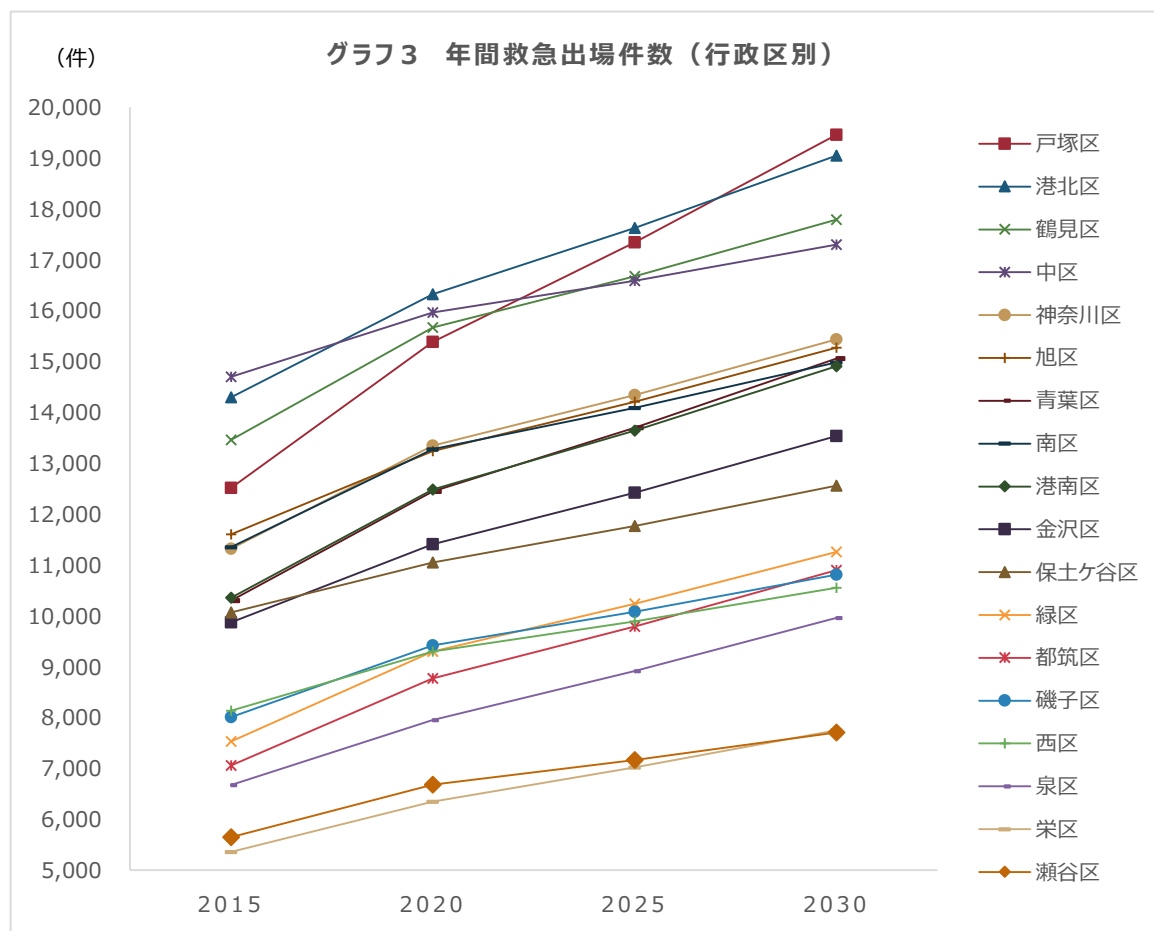


(2) 現在のピークタイムである午前中がさらに増加傾向となり、10 時台の平均出場件数が 40 件（2015 年の 1.43 倍）となる等、日中の救急出場件数が大幅に増加し、夜間との差が顕著になる見込みです。

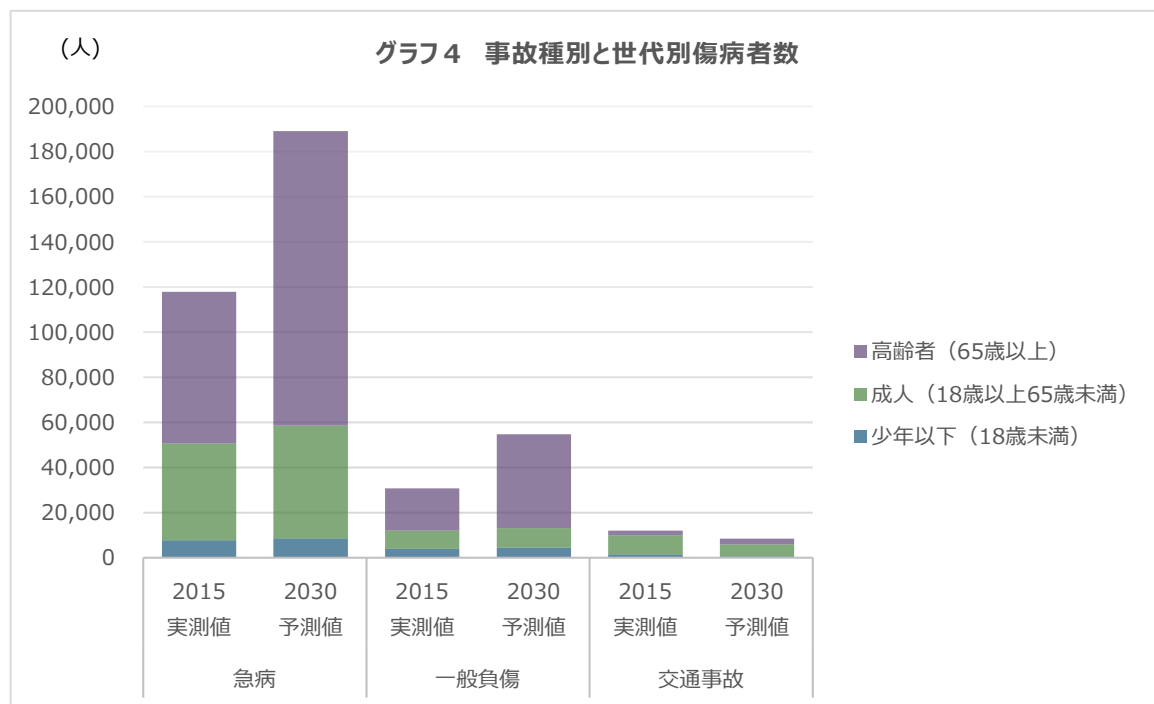


現在、出場 1 回あたりの活動時間は約 90 分程度となっています。2030 年には、このような状態が恒常的に発生し、地域によっては、出場可能な救急車が不在といった事態が生じる恐れがあります。

(3) 行政区別では、全ての行政区において救急出場件数が増加を続けますが、10年以上救急出場の最高件数を記録してきた中区を、区内人口が多く、かつ、高齢化率が高まる戸塚区、港北区、鶴見区が追い越す見込みです。



- (4) 交通事故による救急出場が減少する一方、急病と一般負傷は増加します。特に高齢者にその傾向が顕著で、増加分のほとんどが高齢者となる見込みです。



3 今後の取組

大幅な救急出場件数の増加により、救急業務だけでなく、119番通報の受信業務にも大きな影響が生じることから、次の取組を重点的に進めていきます。

- (1) 横浜市立大学との共同研究（出場件数増加に伴う現場到着時間の延伸等）の継続
- (2) 研究結果のオープンデータ化による救急需要対策に関する公民連携事業（救急広報活動、病院救急車や患者等搬送事業者の活用等）の検討
- (3) 国内唯一の消防局コールトリアージシステム[※]を用いた119番通報対応要領の検討
- (4) 救急需要増加に適切に対応できる救急体制（救急車台数、配置場所、急増する日中の救急要請に対応する救急隊等）の検討

等に取り組めます。また、引き続き、医療関係団体や救急医療機関等と連携した救急車利用に関する市民広報活動に取り組めます。

※コールトリアージシステム…119番通報者からの聴取内容により傷病者の緊急度及び重症度を識別するシステム。